

D・H・ロレンス原作『ポール・モレル』(一)

D・H・ロレンス 著
山田晶子 訳

解題

当翻訳『ポール・モレル』は本邦初訳である。この小説について解説するに当たり、先ず作者D・H・ロレンス (David Herbert Lawrence) について述べよう。一八八五年に生まれ一九三〇年に亡くなったロレンスは、モダニズムという芸術思潮の時代に活躍した作家である。モダニズムの時代について簡単に述べてみよう。モダニズムの時代は一九世紀末から第一次大戦を挟んで一九三〇年頃までを指すと言われる。この思想の先達は、ダーウィン、フロイト、ニーチェ、フレイザー、ソシュール、マルクス等である。彼らは一九世紀的な価値観や既成概念に一大変革をもたらした。モダニズム運動は、絵画や彫刻、詩や小説に及んでいる。表現主義、キュービズム、シュールレアリズム、ダダイズム、フォーマリズム、象徴主義、未来

派、ヴォルテジズム、プリミティヴィズム等がある。

英文学では、モダニズム運動は一九二〇年代前後にピークを迎える。この時代は大英帝国の衰退、第一次大戦とその結果としての社会的混乱、産業化・都市化、労働運動、女性の社会的進出、ロシア革命、ファシズムの台頭等があった。

モダニズム文学作品における主要な特徴として、既成の価値観への懐疑、人間の内面・無意識の探求、作品の結末がオープンエンディングになっていること等が挙げられるが、以上の特徴はロレンスの作品にも目立って見られるものである。

ロレンスは、イギリスのノッティンガム州の炭坑村であったイーストウッドに、父である炭坑夫ジョン・アーサー・ロレンスと母リディアの第四子として誕生した。妹が一人いた。ロレンスの母親リディアは敬虔な清教徒であったため、禁欲的であった。彼女は教養豊かであって万事に節制を求める厳しい性格の女性

で、自分の夫に対しても、特に官能的な面において厳しい態度で接した。飲酒についても厳しかった。一方、ロレンスの父親アーサーは、読み書きにも不自由するくらい教養に欠ける炭鉱夫であつたが、酒好き、ダンス好きであつて官能的な生活をこよなく愛する男であつた。このように相対する性格の夫婦の息子として生まれたロレンスは、少年時代は母親の影響を濃く受け、母親の期待する男性になろうと努力した。家が貧しかったため、母親の期待とは社会的に成功することであつた。小学校時代から優秀な生徒であつたロレンスは、ノッティンガム大学へ進学して教員免許状を取得し、ロンドンのクロイドン小学校の教員になつたが、病弱な体質であつたため退職しなければならなかつた。

ロレンスは、母親の性質を受け継いで、絵を描いたり読書をしたり詩を書いたりすることが好きな文学青年であつて、母親への愛情は深かつた。しかし、母親が彼に注ぐ愛情の深さに感謝する一方で、思春期を迎えると、彼はそれを疎ましく思い、また振り切りたいと奮闘しなければならぬ状態に追い込まれた。それは、彼の恋愛に母親が干渉する度合いがひどかつたためである。『息子と恋人』(Sons and Lovers)では、母親とその息子であるポール(ロレンスがモデルになつている)と彼の恋人ミリアムの三角関係が詳細に描写されている。これは精神分析学で言われるエディプス・コンプレックスの状態である。ロレンスは、母親の影響もあつて、ミリアムのモデルとなつた女性であるジェシー・チェインバーズと破局を迎えた後、大勢

の女性と恋愛関係を結んだ。

ロレンスの第三作目の長編小説である『息子と恋人』は一九一三年に出版されて、彼を文壇で有名にした。この小説の草稿が当翻訳である『ポール・モレル』(Paul Morel)第二稿である。『ポール・モレル』は、第一稿が一九一〇年一〇月中頃から一月中頃にかけて書かれたが、ロレンスはその後これを中断していた。その後一九一一年三月頃から七月頃にかけて第二稿が書かれたが、ロレンスはまた中断する。その後一九一一年一月に『ポール・モレル』第三稿を書き始め、一九一二年三月までに完成した。その原稿を一九二二年四月にウォルター・ドウ・ラ・メアに送り、六月に書き直してからハイネマン社に送つたが出版を拒否された。その後ガーネットに送つた。一九一二年五月に題名を『息子と恋人』に変更した。その後また手直し、一九一三年五月二〇日に『息子と恋人』がダックワース社から出版された。『息子と恋人』は、初めて草稿が書かれてから三回書き直されたのである。当翻訳『ポール・モレル』はその第二稿であるが、内容は最終版とは全くと言っていいほど異なつたものであり、別作品として読めるであろう。当翻訳の原作品である第二稿の『ポール・モレル』は二〇〇三年にケンブリッジ版によつて初めて出版された。『息子と恋人』と比較して読むことによつて、ロレンスの思想上の軌跡を辿ることができるとする貴重な書物である。

キーワード・母、父、男同士の友情、飲酒

バイロン風の襟のナイトシャツだな。最下層の出であるジェリーだったが、これらの流行には鑑識眼があった。モレルは本能でそれを悟り、自分が彼に与えた良い印象に満足した。

二人は病気について、そのあらゆる病状とあらゆる症候を楽しげに話し合った。階下にいたモレルの奥さんは、二人が、一緒にがつがつとつづくどんな下品な話題を見つけたのか想像できなかつた。二人は老いた二羽のカラスであつた。ジェリーは、脳炎を患つたことがある人間のことを話した。その男の頭は真つ白になつたそうさ。

「俺の頭は大丈夫だな。」

モレルは半分心配し、半分は確信を持つて言つた。

「大丈夫だ。問題ない。」

ジェリーは請合つた。モレルの頭は、靴磨き人と同じ位真つ黒だつた。彼は、自分の頭が真つ白になつていないことに腹を立てた。

病気について話し合っているさなかで、ジェリーは声を小さくした。

「ポケットにエレンの最高級のものが少しあるんだ。」

と、彼は言つた。

「え？ 何だつて？」

モレルはかなり驚いた。

「エレンの自家製の一番いい奴なんだ。」

ジェリーはそつと繰り返した。エレンは「羊毛亭」の女主人だつた。ジェリーは胸ポケットから平たい壘を一本取り出した。モレルはそれを見た時、ショックを受けた。その間はずつと、彼は、ジェリーが飲んだくれなのだろうかと思えながら、興奮と期待で微かに震えていた。今や彼は、自分の恋人がついに「イエス」と返事をしてくれた時の男のように、胸がうずいていた。彼は枕に頭を載せて仰向けに寝ており、甘美な犯罪が近づいていることに全く圧倒されていた。

「一口やる気があるかね？」

と、ジェリーは訊いた。

「ほんの——一口。」

と、モレルは言つたが、心臓がドキドキしていたのでほとんど口を利けない程であつた。

ジェリーは、階下の物音に真剣に耳を澄ませていた。静かに壘の栓を抜いた。

「エレンは、どういふ訳だかそれにウイスキーを注ごうとしたんだが、俺は止めてくれ、と言つたんだ。おめえはうめえビールを飲めるぜ。体には影響はありやしねえ。こんな少量だからな。」

彼はすごく小さな声で囁いた。茶色の半パイントの液体を含んだ平たいラム酒の壘を、用心深く投げてよこし、友達の方へ

体を傾けた。モレルは口を開いた。それは、二人の男にとって、親密な、興奮するが哀歓を誘う一瞬であった。震える手を半分ジェリーの手に委ねてモレルは壘を口に合わせた。彼はゆっくりと愛撫するように喉一杯飲み、しばらくそこに留めておいて最後の少量を飲み切った。それから彼は壘を押し戻し、枕に沈んだ。

「いや、素晴らしい。」

と、彼は微かに囁いた。

「おめえのことを思い出したんだ。」

と、ジェリーが答えた。

「嬉しいぜ！」

もう一方が言った。

それは両者の人生にとって濃厚な一瞬であった。モレルは一喉分飲んだことで甘美さに満たされながら仰向けになった。ジェリーは宗教儀式に取り組んでいるかのように壘を手にしなから、友の上に、恋人のように屈みこんだ。

「おめえも飲めよ。」

と、モレルは弱々しく言った。

「いや——いや。おめえ。おめえのために持つてきたんだ。」

ジェリーは、小さな真面目な声で抗議した。

「おめえのためだよ。」

モレルは一秒か二秒じつとしていた。

「全部は飲めねえよ。」

彼は悲しげに答えた。

「ほんのシンブル一杯分しか入ってねえじゃねえか。」

ジェリーはやさしく抗議した。

「俺は飲む勇気がねえよ。」

モレルが囁いた。

「おめえにねえつて！」

ジェリーが叫んだ。

「ねえんだ——親友！」

涙がジェリーの目に溢れた。彼はうなだれた。しかし直ぐに頭を上げて、少し壘から飲んだ。腫が二回上下した。それからため息をついた。赤いハンカチで壘の首を拭き、揺れているビールを絶望的になつてしげしげと眺めた。涙がこぼれるのを恐れて、あえてモレルを見ようとはしなかった。そこでそわそわして、ついに思いついて火をかき回し始め、重い感情にはけ口を与えた。間もなく火かき棒を降ろして友達を見た。モレルはかなり元気を出していた。片目で壘をじろりと見た。

「さあ、一口飲めよ。」

と、ジェリーが促した。

モレルはエネルギーを呼び起こして、喉一杯分飲み、うなだれ、もう一度勇気を呼び起こして更に一口飲んだ。壘を押しやつて、体を仰向けにした。

「気分はどうだい？」

と、ジェリーが心配そうに訊いた。

「素晴らしいぜ。」

もう一方が答えた。

ジェリーは、次を待つて、彼を覗き込んでいた。

「全部飲んでしまつてくれ。」

目を閉じて横たわつたモレルが囁いた。じつと見ていたジェリーはハンカチをポケットから取り出して、鼻と悲しみに満ちた目をそつと拭き、友を見て、次に突然残りのビールをごくごくと飲んで、とうとう壘をポケットに突つ込み、腕を膝に載せて惨めに落ち込んだ。僅かの間、友人の沈黙した顔を眺めていた。

そして心配になつて訊いた。

「ウォルト、お前、気分が悪いのか？」

モレルは重たげな目を開けて、彼を見て答えた。

「頭がくらくらするんだ——！」

ジェリーの目は涙で一杯であつた。彼は涙を拭いて、チョッキのポケットからパセリを二本取り出した。

「ウォルト、このパセリをちよつと齧つてみねえか。」

と、彼は声を掛けた。

「そうだな！」

モレルは囁いた。もう一人は質問を繰り返した。

「やつてみよう。」

病人が言つた。

ジェリーは茎から葉を注意深くむしり取つて、巻き上がった

パセリの葉を友人の唇に挟んだ。友人がゆっくりそれを噛むのを眺めていた。その間にも自分でも葉を暫く噛んでいて、それから火の中にそれを吐き出して、全部の茎を用心深く燃やした。彼はモレルの方を向いたが、友人は葉を飲み込んでしまつていた。

「お前の匂いを嗅がしてくれ。」

ジェリーは、鋭い鼻をモレルの生い茂つた口髭に入れた。

「何も問題ねえよ、お前。針のように鋭い鼻があつたつて、俺の様には分からねえさ」

と、ジェリーは答えた。

モレルはベッドから手を出して、ジェリーの手に置いた。

「おめえは俺には最高の贈り物だ。」

彼は呟いた。ジェリーは大きく鼻を嚙つた。

間もなくモレルの奥さんが上がつてきた。彼女は鋭く夫を見て、近づいてきて彼の額に手を置いた。

「喋りすぎたんじゃないの？」

と、彼女は優しく言つた。

「いいや、そんなことねえです、奥さん。」

と、ジェリーが静かに落ち着いて答えた。

「二十分間のうちに六語以上話しておりやしません——わしもそうだつせ。」

「とにかく、体に障るぐらい興奮しているわ。」

と、モレルの奥さんが頑として答えた。

ジェリーは深くため息をついた。

「旦那さんは元気がなくて弱っている。」

と、彼は絶望して答えた。

「静かにしておいてもらった方がいいね——前よりも気分が悪いのかい？」

彼女は夫に尋ねた。

「卵入りミルクを飲むかい？」

「少し休みてえんだ。」

と、彼が呟いた。

彼女はブラインダーを降ろした。待っていると、夫は眠りに落ちたようだ。

ジェリーは立ち上がって階段をぎこちなくゆつくりと降りて行き、家から出た。

モレルは急速に回復に向かっていた。彼はもともと元気な体質であったため、病気が快方に向かった場合は、直ぐに良くなった。間もなく階下へ降りてゆき、ぶらぶらし始めた。病気の間は妻までもが彼を甘やかしていて、増長させ、ことさらに優しく扱った。彼は大切にされるのが嬉しかった。だからもう一度元気になってしまふのは気が進まなかった。手をしょつちちう頭にやったり、眉毛を上げたり、口の端をひっぱって下げたり、痛くもないのに痛いといった振りをした。だが妻を騙すことはできなかった。最初は優しく笑って何も言わなかった。が、とうとう彼女は言った。

「まったく！ そんなに哀れな風をしないで！」

彼は彼女の言葉は理解できなかったが、意図を理解した。それで怒ることはないと思った。その教訓はあまり厳しいものではなかった。

「私だったら、そんなぐずぐずする病人にはならないわ。」

と、あとで彼女は言った。

彼は頭を下げ、息を殺して彼女に毒づいた。モレルの奥さんは、諦めのために朽ち果てるような弱い女ではなかった。そんな弱々しい女ではなかった。素早く怒りをほとばしらせることよつて、彼女は元気で続けた。

少しの間は、モレルの奥さんはこの友好的な状態が継続すればいいのに、と微かに望んでいた。そして、自分が彼を大事にしているのは、彼がただ弱っているせいなのかどうか考えることを、忘れていたか或いは拒否していた。しかし、辛抱強さのおかげで、ほぼ一年位は家庭内に平和が続いた。一時期は、モレルは完全に禁酒していた。とかくするうちに、妻は夫にいらいらが募つてゆくのを感じた。この上ない勇気を振り絞つて、彼女は自身の厳しい高邁な主義に背くことにし、一樽分のビールを家の中に運び入れさせた。これは大きな譲歩であった。モレルは節度を保つて飲んだ。だがいらいらは消えなかった。

彼女は彼が音を立てて液体を飲むのが大嫌いであった。彼はせわしく動き、新聞を読もうと奮闘し、一方彼女は夕方の仕事をしており、彼の手がグラスに向かうとき神経に障る音を立て

てるのをいつも恐れていた。彼は面白い記事の見出しを彼女に読んで聞かせようとし、ゆつくりと発音をして輪投げをする男のように言葉を投げた。これは辛い状況であったが、彼女は辛抱強く聞いた。彼女が彼を急かして言葉を挟み、その言葉が彼が言おうとしていることに合っていないと、彼はその言葉を受け取って大人しく繰り返した。しかし子供たちは音を立ててはならなかった。彼は頭痛がするから、と言いつつをした。子供たちはハツカネズミのように静かにしていなくてならなかった。モレルの奥さんは、子供たちが音を立てるのを聞きかたつたであろう。それは彼女を慰めたであろう。夫のぎこちなさが彼女を苦しめた。二人の間に沈黙が来たときは独特の雰囲気になった。二人ともが友好的であろうとしていたが、各々の存在がそれを、相手の黙想を、穏やかさを邪魔し阻害した。モレルの奥さんは、夫が九時になる頃に寝室へ向かう時、すやすや眠っているポールと自分を二人きりにしてくれる時ホッとした。一方で、モレルは眠りにつくのが確かに嬉しかった。

この不自然な均衡状態を振り払ったのは赤子であった。十ヶ月のこの赤子は、耳の中に腫れ物があった。子供は痛がつて泣き喚いた。母親は、本当の痛みのために痙攣する赤子と、悲しげな憐憫の顔をする夫との間で引き裂かれた。彼女の神経は高ぶつて、いらいらする軽蔑の感情を夫に、惨めな存在に向けた。赤子が泣くために動揺して、夫がため息をつき、口角を下げて不機嫌に新聞を突き出す時には、彼女は健気に自制心を奮い起

こした。

子供は父親によつてはなだめられなかった。その子は彼の腕に抱かれると体を固くした。全体としては大人しい静かな悲しげな子供であったが、父親の腕の中では泣き叫んで、幼い野ウサギのように、彼の手から身を引こうとした。モレルはちっちゃな手が彼のあごを押し戻すのを感じ、赤子の顔が背けられるのを見、濡れた青い目が悲しげに母親を求めるのを見て、困惑して、言った。

「おい、早く、子供を受け取ってくれ。」

「あなたの髭が怖がらせるのかわ。」

と、彼女は言った。しかし彼女は胸に子供を抱きしめて、子供が顔を彼女のあごと胸の間に埋め、彼女の中に隠れようと擦り寄り、小さな腕で彼女の首を掴んだ時、涙が一杯溢れてくるのを抑えようとしてあふたしなげならなかった。モレルは赤子を恐れるようになった。彼は子供の前ではひるんだ。

とかくするうちにもう一人の赤子が生まれようとしていた。何年もの嫌悪の感情が続いた後で穏やかな時が訪れた際の果実であった。モレルの奥さんは、理屈で分かっている以上に感覚的に、ポールに対して憐れみの情を抱いていた。彼に対する彼女の深い思いの中には、彼の中に彼女に対する審判が存在しているかのような恐怖の種があった。モレルの感情も同じようなものだったかもしれない。

「この子供によつて私は審判を下され罰を受けるのだ。」

ポールが一七ヶ月になった時、モレルのおかみさんは家の世話をするために来てもらった女性に彼を渡した。

「こんな小さな時に母親から離されるなんて。」

と、母親は看護婦に言った。

その女性はポールを見た。彼は可愛くなかった。ふつくらとして、青白く、重たげな目をし、眉の間には、いつも彼の特徴である独特の苦しんでいるようなしわを寄せていた。それはアーニー・モレルにも微かに見られた。しかしポールの目は姉の目とは違っていた。彼女の目はかなりいらいらとして落ち着きがなかった。彼の目は静かで、重い放心状態の表情を浮かべていた。

「哀れな子羊！」

と、看護婦は叫び、彼にたつぷりとキスをした。赤子はそれには何も感じなくて、母親が目からゆつくりと涙を流しながら出て行った時、ただ体を強張らせて彼女を見ていた。

新しい赤子はまた男の子であって、きれいで美しかった。モレルの奥さんは、新しい赤子を見て横たわっていた。彼の眉毛は微かに釣り上がっていたが落ち着いていた。二、三日後には、彼の美しい青い目は、すでに率直さを示しており、生きいきししていると母親の目には映った。

「この子はお父さんに似るでしょう。」

と、彼女は言つて、どういう訳かこの思いが彼女を平静にした。モレルが二階へ上がった。彼は赤子を抱き上げてキス

をした。

「おお、可愛い子だ！ 可愛いアヒルさんだ。」

と、彼は言った。

幼子は、父親の髭に触れて鼻にしわを寄せたが、人懐っこく

こぶしを振った。

「あんたに懐いているわ。」

と、母親は冷淡に言った。

「おお、可愛い子！ ああ、小さな紳士だ！」

と、父親は小さな子供を揺すぶつてあやしなながら叫んだ。

「その子を振り回さないで。」

と母親は大儀そうに言った。

「おめえは大丈夫か？」

と、モレルは声を低めて訊いた。彼は彼女が本当に気に入っていた。そこに横になつているのを見て心底感動していた。だが、一旦家の外に出れば、彼は彼女を忘れてしまうであろう。そのことを彼女は知っていた。

「これ以上はない位元気よ。」

と、彼女は答えた。

「そうか。」

彼の返事は気の毒がつているような、同情しているような風に聞こえた。彼女は、彼のむやみに感傷的な哀れみの視線を避けようと半ば目を閉じ顔を背けた。二、三秒の間、彼はこのように憐れみと悲しみの思いを込めて彼女を見下ろしていたが、

彼女にとつては腹立たしいものであった。

メイさんが入ってきたので、彼は我に返った。彼女は三十歳そこそこの教養ある婦人であった。完全に真っ白なカールした髪と、厚い黒い眉毛と、凜とした感じよい唇を持ち、めがねをかけていた。

「では、奥さん。男の子がもう一人ですわね！」

と、彼女は嬉しげに言つて、奥さんに駆け寄りその手にキスをした。

「まあ、なんて可愛い子なのでしょう！　どんな名前をつけるの？」

彼女は母親を離れて父親に笑いかけた。彼はいつもメイさんに惹きつけられた。彼女は教養がある婦人で、彼に対して非常に礼儀正しかったからである。

「分らないです——メイさん、何か良い名前がありませんか？」

と、モレルは、本能的に軽くお辞儀をして答えた。彼は生まれつき婦人に対して親切であった。多分それはフランス人の血が混じっていたためであろう。

メイさんは母親を見た。モレルの奥さんもメイさんを見た。後者の目は悲しみに満ちており、顔は静かであった。

「アーサーと名付けたらどうかしら。」

と、彼女は言つた

「ええ、いいわ。」

と、母親が答えた。

「おれが特別気に入っている名前だけ。」

と、ウォルター・モレルが言つた。モレルの奥さんはメイさんの方を見た。二人の女性は同じ歳であった。しかしメイさんの目には失望の悲しげな表情があつた。モレルのおかみさんの目には幻滅の一層濃い悲しみが宿つていた。しかし幻滅は失望を憐れむことができる。モレルの奥さんは、処女であるメイさんが自身の子供でない赤子にアーサーと名前をつけた時、彼女を憐れんでいた。

間もなくレヴェル氏が入ってきた。牧師は今もモーヴェンに滞在しており、ブリーチ五二番地をしょっちゅう訪ねて来ていた。彼が、これから唱えようとする訓話の文言を作成するに当たり、モレルの奥さんと話し合うことは習慣になつていた。そのとき彼は文言をメモしておき、それをモレルの奥さんに見せて修正してもらい、訓話を作成したのであつた。モレルの奥さんは彼の文章を並べ替えつなぎ合わせて形を作つてやつた。彼女はこの作業をするために家事をする時間を節約していた。牧師は彼女の助力のおかげですごく助かつていた。彼は訓話を殆どそらんじることができたので、とうとう説教者としてこの上ない高い評判を獲得した。

「作成する上であなたがとても関わつてくださった訓話を、私自身のものとして説教することが適切であるとお思ひになりますか？」

と、彼は物思いに沈んで頭を片方にかしげ、彼女に瞬きしながら尋ねたものだ。彼女は笑った。

「重い豊かな土を掘って、砂のように軽くすることは適切じゃないですか？ それとも主が、或いは自然が与えてくれたままの状態で種を撒くべきでしょうか？」

彼女の逞しい威厳は彼を簡単に満足させた。

メイさんは、エバーウィッチの出身であったので、レヴェル氏を個人的には知っておらず、ただ彼を説教者として尊敬していた。彼は彼女に対して内気であった。だがモレルの奥さんに対してはそうではなかった。彼は母親の方に身を屈めた。彼の内気な茶色い目は心配していた。

「後悔していますか？」

と、尋ねた。彼は彼女が妊娠していたことを知らなかったのであった。

「後悔することがどんな役に立つのかしら？」

と、彼女は笑った。

メイさんは脇に身を引いていた。

「だけど旦那さんは——！」

牧師は、不確かであるかのように、考え込むように目を細めた。

「ええ、この子は元気な子供よ。ポールと違って美しいわ。」

メイさんは明るく微笑みめがねを輝かせた。牧師は彼女を見、顔を赤らめ、お辞儀をし、神経質そうに母親を見た。彼女

は彼にとっては母親のようであった。

「だけどポールは——ポールは私たちにとって可愛い赤子です。」

と、彼は言った。

「可哀そうな小さな子。」

と、メイさんが言った。

モレルの奥さんは答えなかった。牧師は彼女の表情を探った。他の誰でも近くにいるとしゃばり者であった。彼はできるだけベッドの脇近くへ行つた。しかし何を言つたらよいのか分からなかった。彼の茶色い子どものような目はモレルのおかみさんを狼狽させることはなく、むしろ気を休ませ喜ばせた。彼が何かを言おうと苦闘しているのが分かった。

「お祈りをしましょうか？」

彼は顔を赤らめながら、確信を持ってないままに訊いた。

「もしそうお望みなら。」

と、彼女は静かに答えた。

彼は、彼女が以前のように疲れやすくなるまいようにと、丈夫になるように、仕事が十分できるほど丈夫になるようにと祈つた。彼女をそんなに疲れさせないように、仕事を軽くするように、彼女を助けてくれるように、と祈つた。次に、神が人々の目を開いて、彼女がどんなに苦しんでいるのかを理解するようにと、あまりにも働きすぎていることを分かってくれるようにと、彼女の精神がいかに立派であるかを理解するようにと、

彼女が神の女王の一人であり、魂が気高いことを理解するように、と祈った。次に、人々がこのことを知ったならば、彼らは彼女に対して謙虚になり、理解し、彼女の立派な願望に対して頭を下げるようになることを祈った。彼は、また、ポールが健康で聡明になるようにとも簡単に祈った。それで全部であった。

メイさんは、恐れを知らない美しい灰色の目で彼を見た。

「牧師さんは美しい魂を持っている。」
と、思った。

モレルのおかみさんは、二人を階下へ行かせ、枕に顔を押し付けて激しく泣いた。彼に対しては母親らしい保護する気持ち以上のものは持つていなかった。疑いもなく、泣くことが彼女の気持ちを楽にしたのであった——それは彼女にとっては珍しいことであつた。

第4章 ポール・モレルが世間を垣間見る

新たに生まれた赤子は人気者だつた。彼はえもいわれぬ金褐色の巻き毛と濃紺の目を持つていた。誰もが彼の愛らしさを賞賛した。だから大きくなるにつれ甘やかされた。ウォルター・モレルは昔の暮らしぶりに耽り始めていたが常軌を逸しているほどにひどくはなかつた。彼はいつも家庭の中で快適な場所を占めることができた。というのも新しい赤子が彼にひどく懐い

ていたからであつた。モレルが在宅している時はいつでも子供は父親を求めた。この結果として二人は親密な同盟を結んだのであつた。アーサーは、父親の見ている前では悪いことは何もできなかった。

この寵児が一歳になったとき、彼は家庭を支配していた。美しく、巻き毛の頭で、横柄であつたが、誰もが彼の気紛れに屈した。モレルは、帰宅すると直ぐにアーサーを抱かなければならなかつた。このことは鉞夫にとっては大きな喜びの源になっていた。以前の苦痛の一つは、彼が帰宅すると直ぐに誰もが閉じこもつて暗くなることであつた。今や、一つの花、美しい赤子が父親の足音を聞きつけると光り輝いたのであつた。モレルは嬉しかった。そしてモレルの奥さんは、この子供の陽気で愛嬌のある性質により気持ちを和らげられて、感情を露わにしてその子を愛した。

とかくするうち、ポールは顔色が悪くて悲しげであつて、様々な病氣と格闘していた。彼の金髪は色が濃くなり、青い目は灰色になり、体は一層ほっそりとなつた。三歳になるまでに、彼は細身で背が高く、動きは軽くて素早く静かで、母親に絶えず間なく話しかけていた。一日中、彼は子ヤギのように母親のすぐあとを追つかけて走つた。彼は非常に早く喋つた。全く小さいときでも子供っぽく母親と会話をすることができ、最初に話した言葉は「おかあちゃん、疲れているの?」、または「おかあちゃん、歯が痛いのか?」であつたと思われる。

子供たちが小さかったとき、モレルの奥さんは神経痛をひどく患っていた。ポールは絶えず彼女を気遣っていた。また、三歳のときに彼はアーサーの乳母代りであつて、わがままな子羊を導いていたのであつた。ポールがたつた四歳で、アーサーが二歳半であつたとき、母親が弟のいたずらに叫び声を上げると思はれ、兄は母親に言つたものだ。

「この子はまだ小さいんだよ、おかあちゃん。本当に小さいんだよ。」

四歳という年齢は彼に自分の優位性をとても意識させたのだつた。だから母親に可愛い弟の失敗を見逃してあげてほしいと思つた。弟はほんの赤ちゃんであつたから。

全体として、ポールは活発で、絶え間なく母親に喋り続けるのであつたが、そうでないときには非常に無口であつた。ときには非常に静かで一時間も物音を立てることなく見かけ上は遊んでいたのだが、時には何にもしていないことがあつた。再び、彼はソファに腰掛けてこぶしを握り締めて、息を詰まらせてししく泣き始め、次には声を上げて泣いていた。ししく泣きからすすり泣きに声が大きくなつていったとき、モレルのおかみさんは言つた。

「なんで泣いているんだい？」

こう言われて、この小さな男の子は痙攣的にすすり泣きをした。母親は繰り返し訊いた。

「なぜ泣くのか言つてごらん。」

「分からないもん。」

と、子供は答えた。

母親の顔は直ぐにこわばつた。

「泣く訳がないのに泣くもんじゃないよ。」

と、彼女は優しいが厳として言つた。

少し経つてから、子供は泣き止んだ。だが、このような発作的な泣き声が始まつた時にウォルター・モレルがたまたま居合わせたとしたら、嵐が起つた。父親は逆上してしまい、自分を抑えることができなくて妻に怒鳴つた。

「何にも問題がねえなら、なんで泣いてやがるんだ。」

子供のすすり泣きは一層激しくなつた。母親は、夫の狂気のようないじめが加わらなければ十分耐えることができた。

「さあ、ポール、泣き止まないんだつたら外へ出しますよ。」

と、彼女は柔らかくしかし厳として言つたものだ。

それで、もし子供の憂鬱が去らなくて静かな泣き声が続いたら、彼女は彼を庭へ連れて行き、オオバコの花壇のそばの腰掛に座らせた。そこでたまたま蝶が彼の気を紛らわせることがあると、もう父親を狂気に追いやるほどには泣かなかつた。この種類のことは、子供が六歳か七歳になつて自分を制御できるようになるまで続いた。

火曜日、水曜日及び木曜日の夕方は、ウォルター・モレルは通常在宅していた。この時彼は金を持っていなかったためである。それから冬が来ると、家族は家庭生活を完全に楽しんだ。

灯りが点されて両親と子供たちは楽しみ始めた。父親は、小さな長靴を修繕したり、木の幹にはめ込まれて作られた旧式の鉄製の棚を、かなづちで元氣一杯打ちながら歌を歌っていた。またはやかんや水汲み用の缶をはんだ付けして修繕していた。或いはヒューズを作った。活発に動いている時は、彼はいつも歌ったものだ。素晴らしいバリトンの声をしていた。そして他の誰も聞いたことがない仕立て屋やジプシーに関するバラッドを知っていた。彼は動きが素早くて正確で、非常に血色が良くて色が黒く、ワイシャツを着てチョッキのボタンを外した姿はその気さくな姿に似合っていた。それで近所の人たちは、彼が陽気に働く姿を見て気分が良かった。

注

- (一) 原書は、D.H. Lawrence. *Paul Morel* edited by Helen Baron (The Cambridge Edition of the Works of D.H. Lawrence : Cambridge University Press: Cambridge, 2003) を用いた。